武田泰淳全集

第十五巻

武田泰淳全集

第十五巻

筑摩書房

武田泰淳全集　第十五巻
昭和四十七年七月二十五日　第一刷発行

著者　武田泰淳
発行者　井上達三
発行所　東京都千代田区神田小川町二ノ八
株式会社　筑摩書房
電話　東京(九二)七六五一(代表)
振替　東京四一二三
郵便番号　一〇一―九一

印刷　株式会社三松堂
製本　和田製本工業株式会社

(分類) 0395 (製品) 72415 (出版社) 4604

武田泰淳全集

月報 14
第15巻 付録
1972年 7月

目次

武田さんのこと……吉田健一
或る縁にし……島尾敏雄
『日本の夫婦』と武田先生……根本長兵衛

東京都千代田区
神田小川町2の8
筑摩書房

武田さんのこと

吉田健一

最初に武田さんに会つたのがいつのころだつたのか、それが戦争中であることは確かであるが詳しいことは覚えてゐない。その時に何人かの友達が集まつてそこへ武田さんも来たやうでそのことに就てもう少し詮索すると我々は皆武田さんの「史記の世界」を読んでゐてその話を聞きに武田さんに来て戴いたのではなかつたかと思ふ。そしてこの本が出たのが昭和十八年で終戦を挟んで武田さんは上海に渡つてゐた筈であるから昭和十八年と終戦の間の一年か二年のうちに武田さんとの付き合いが始り、戦後に又顔を合せることになつて今日に至つてゐるといふことになる。併し戦争中のその僅かな間にも何度も会つてゐた記憶があるのだから当時はかなり頻繁に行き来してゐたと考へなければならなくて一つには我々はあの頃は何と言つても暇だつた。その証拠に戦後に武田さんと会つて話をした時のことはその殆どが記憶に残つてゐるが、あの戦争中の一、二年間はそれが始終だつたやうで今はそのうちの一部しか思ひ出せない。

何もすることがなくてそれでもどうにか暮して行くといふさういふ日々だつた。又それだから本もよく読んだといふことになるかも知れなくて読むに足りる本が出ることが稀だつたからなほ更だつた。それまでにも「史記」を拾ひ読みしたことはあつたが、この本がどれ程のものかといふことは実は「史記の世界」を読んで始めて知つた。既に読

んだ部分も武田さんが取り上げて論じればそこに全く未知の世界の展開するのだつたから本は読みやうである。勿論こつちの漢籍といふものに対する未熟といふことはあつた。併し何となく惹かれて今でも覚えてゐる部分でも武田さんの文章を通して改めてこれを見れば殆ど別なものの感じになり、これはこつちの未熟よりも武田さんの造詣といふものの問題になる。序でにさうした比較をもう少しばかり続けるならばこつちは本は読みはしても仕事らしい仕事は全くしなくてその日その日を送つてゐた。もし強ひてそこから何かの教訓が引き出したければ時間も使ひやうであるといふことだらうか。

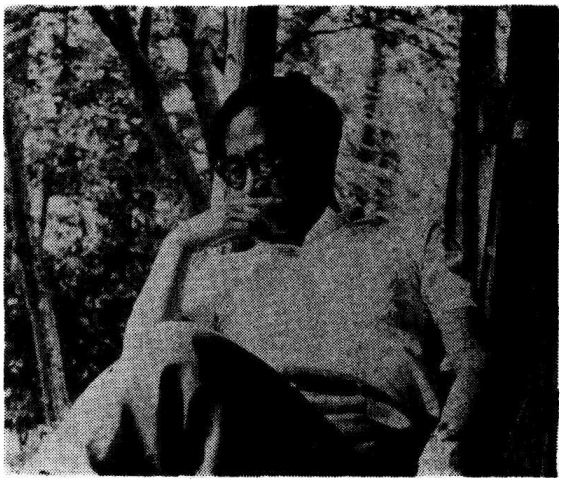
その戦争中の武田さんとの付き合ひに就て一つ二つ記憶を拾つて見ると、いつか武田さんがその頃住んでゐた寺にやはり友達何人かと招かれて行つてそのお寺が非常に大きなもので漢籍が沢山あつたことを覚えてゐる。そしてその時に風呂を御馳走になつた。その頃はどこでも燃料が不足してゐて風呂場があつても風呂がなかなか立てられなかつたから風呂に入れて貰ふのは文字通りの御馳走だつた。その燃料をどうしてゐるのかは遂に聞かなかつたが或はあの大きな寺の一部を壊して燃やしてゐたのかも知れない。又もう一度はやはりその寺に呼ばれて行つて豚の、これも当時は文字通りの御馳走になつた。あれだけ大きな寺ならばその位のものを持つて来る檀家があつたのではないかと思はれる。併し久し振りに食べる豚肉で胃がそのやうなものと暫く縁を絶たれてゐたせゐもあり、とても存分に楽ませて戴くといふ訳には行かなかつた。あの頃はさういうことがあると後々まで思ひ出しては残念な気がしたものである。

戦後に又武田さんに会つたのがいつだつたかはこれももう覚えてゐない。その頃は戦争中と違つた形で凡てが不足してゐて金さへあれば大概のものが手に入つたのが戦争中よりも始末が悪かつた。武田さんも同じやうな状態だつたのではないかと思はれて戦後に最初に又顔を合せた時かどうか、もしその時でなければ二度目に会つたのは有楽町駅の近くにその頃あつた飲み屋でだつた。併しこれも注釈が必要で飲み屋と言つても酒を飲ませる店ではなくて味と匂ひとアルコール分の濃さから察するにガソリンを何かの方法で少し薄めたのではないかと思はれるものをそこでは客に出してゐた。あのひどい飲みものが当時は何と呼ばれてゐたのだつたか。併し強いだけに茶椀に注いだのを一杯飲み終れば味も匂ひも気にならなくなり、その晩我々は上海から帰つて来た武田さんを迎へて茶椀一杯三十円のその飲みものでいい気持になつた。確かにその晩も他に何人かゐ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た。その頃はまだ戦争中の暇な状態が一応続いてゐる形になつてゐて友達同士で集るのも戦争中と余り変らなかつたやうに覚えてゐる。

併しそれから間もなく武田さんは盛に書き始めて新聞雑誌の類を見てゐてもそれは解つた。これは大変な量に上るもので終戦までに武田さんが書いたものは「史記の世界」の他にさう沢山はないと思はれるから例へば今度の全集に収められたものの殆どが戦後に書かれたものであることになる。さうに違ひないと言つてよささうなのはその全集の内容を見ても戦後のものといふ感じがするものばかりだからで、それでは何故さういふ感じがするかといふことになればこれは実は武田さんが一番書いてゐた頃のものをこつちは全く読んでゐないからである。それは何も武田さんのものに限つたことではない。既に一杯三十円の酒だか何だか解らないもののことに触れたが、その三十円が翻訳一枚に就て渡された金だつた時に熱読したとも言へるのはさうして訳した本だけだつた。お蔭で翻訳の仕事といふものがつくづくいやになり、それでもその仕事をしなくなつたのが極く最近のことなのだから色々な点で明かに武田さんとは違つてゐる。



青梅にて（昭和39年）

武田さんと或る時話をしてゐて又「史記の世界」のことになると武田さんはもう一つ明末清初の明の遺臣達に就て何れは書く積りでゐてその材料も揃つてゐるのにまだ書けずにゐるのはその材料を整理するのが大変だからだと言つたことがあつた。併しこれは期待していいものに違ひない。この頃の髯を生やした武田さんの写真は明の遺臣の風貌がある。

（評論家）

或る縁にし

島尾敏雄

神田の喫茶店で埴谷雄高さんとはじめて会っているところに武田さんがはいって来た。埴谷さんは私を武田さんに見合わせたが、彼はすぐにまたどこかに出て行くつもりのようであった。あとで彼の夫人になったひともそばに居た。そのどこかに彼は早く行くべきだと埴谷さんは言っていた。だから私たちはあわただしい握手をすることになった。私はもっとはなしをしたい思いにふくらんでいるのに、彼の方は出かけぎわだからそれどころではないように見えた。私の握手はつい力がこもったが、彼は深くは握らせずその指先で私の掌をくすぐった。わけのわからぬなつかしさでうっかり近よったところを足払いをかけられた気持になった。いやそう言ってもどこかちがう。いたずらっぽい笑顔で彼は片目をつぶってみせていたから、勝負は後日におあずけ、とでも言っているようで、ちょっと私もふるいたったのだ。しかしもうくすぐりかえすわけにもいかない。彼はやせて頭が小さく見えた。

二度目は友人とふたりで、喫茶店で待つ、という私名儀の電報を打った。それは友人の発案だが、気のすすまなかった私がそれをあえてとどめなかったのは暴走をはじめたトロッコにどきどきしながら乗っているような気分に陥っていたからだ。時刻まで待ったあとで、中央線沿線に間借中の彼の家におしかけた。彼は家に居て、ふたりとも二階に通された。電報のことはどちらからも口にしなかったと思う。友人が積極的にしゃべった。隣室で物音がしていたが、私は夫人が化粧をしているのだと思いこんでいた。彼女は大きな目を私たちに据え、ゆっくりした物言いで武田さんが家に居ることを言い、二階に導いたのだったが、とても疲れているように見えた。だから早く辞去のきっかけをつかもうと思っていた。ふすまがあけられ、夫人はビール瓶を何本もいっしょに運んで来て、私たちがあぐらをかいている畳の上に、だまって置いて行った。

私は武田さんの「『愛』のかたち」をむちゅうになって読んだ。時が流れ私は神戸から東京に移住した。妻が心因性反応を示すようになったので病院に入れ、毎日小岩から信濃町まで通うことになった。ある日、病院からの帰りに

むしょうに武田さんに会いたくなった。そのころ彼は目黒の実家の寺に住んでいた。すこし時刻がおそかったにもかかわらず、私は熱っぽくなってその寺をさがした。ようやく見つけた寺の境内は深山の気配に満ちていた。引っ返した方がいいぞと思いつつ、何かに魅きつけられるように奥の方にはいって行き、そして広い玄関でおとなっている自分を発見した。夫人があらわれにこりともせずにこちらを直視するあの大きな瞳を久しぶりに認めた。中央線沿線のときにくらべすっかり元気をとりもどしていると思った。私はすぐ二階の広い部屋に通された。武田さんは本の山にうずまって仕事をしていたようであった。静寂な書斎に泰然として人間や自然や歴史と対決している姿勢が私を包みこんで来た。頭もからだも大きく見えた。夫人はビールを運び入れるとすぐ階下におりた。私はいくらか饒舌に自分の置かれているそのときの苦境をしゃべった。いつまでもそうしていたい気持があり、武田さんの仕事を邪魔するようで早く引上げなければいけないと思いつつきりをつけかねていると、夫人がふたたびあらわれてマヤのためにみやげものを手渡された。大方の店が戸を閉じている中で一軒だけ開いていたはきものやでマヤのためにと赤いぽっくり下駄を買い求められたのだという。武田さんの嬢ちゃんとあとさきの年ごろのマヤのことを覚えていてくださった。涙がこぼれそうになりながら私はマヤと長男が待っている小岩の家に帰った。時刻は深夜の領分にはいっていた。

それからほどなく、奥野健男と昼日なかに目黒の寺をかさねて訪ねたが、そのあと私は妻といっしょに精神病院にはいった。ひととおりの妻の治療がすんでから私たちは奄美大島に移住した。そして十七年になんなんとする歳月が流れてしまったのである。あれもこれもおろかなにんげんの生のいとなみ。今もそのことにかわりはないが、武田さんの豪毅な仕事はひとつの殿堂を築きつつあり、欝然とした樹相をあらわしはじめている。もう私は彼には近づけないが、一筋のえにしは私を結びつけているのかもしれないと思っている。それは武田夫人が私の妻に示す言いようのないあたたかな信号のことである。あれはいつごろからであったろうか、武田一家の避暑先や旅先から、見知らぬ妻にあてて気持のこもったおくりものがとどけられるようになったのは。私の家の中にはどちらを向いてもその品物に目のぶつからない場所がないほどで、それらを見るにつけ妻の目頭はうるんでくるようなのだ。

私の妻が武田夫人と会ったのは奄美大島移住後六年ぶりに東京に旅行をしたときがようやくはじめてであった。そ

れまではおたがいに顔を合わせたことはなかったのだ。四十一年に鹿児島県坊津で梅崎春生文学碑の除幕式が行なわれたとき、武田夫妻も出席したが、たまたま妻や長男と共に鹿児島に出ていた私はその式に参加し、鹿児島から坊津までの長い自動車往復を私たち家族は武田夫妻と同乗した。途中の峠道に車をとめ、野いちごをとって食べたことなど私たちには思い出深い記念のひとつとなった。私が武田さんと比較的ゆっくりはなし合えたのは、あの赤いぽっくりの晩とこの薩摩半島自動車縦走のときだけと言っていいかもしれない。先日東京に出たとき、武田さんが病気ときいて久しぶりに赤坂のコーポラスの家を訪ねた。彼は菊人形のように坐っていた。そばの夫人の大きな目を見ると私は防禦の仕様がなくなってしまうようであった。ビールが出、ホーム・バーでこしらえられた牛の焼肉もまたたくまに卓上に並んだが、私はどちらにも申しわけのように口をつけただけで辞去してしまった。ほんとうはもっと貪婪に食べつくしたかったのに。しかし闖入者が残して行ったあとの武田さんの疲労を考えると、そうするわけにはいかなかったのである。

（作　家）

『日本の夫婦』と武田先生

根本長兵衛

『日本の夫婦』に顔を出す「同行のN君」というのが私です。昭和三十八年上半期の「朝日ジャーナル」連載ですから、すでに九年も前の話。無精で取材メモも保管しておらず、わずかに記憶力を総動員して断片的シーンの思い出を綴らせていただくことしかできません。昨年の初夏、「潮」誌が企画した武田泰淳対ロベール・ギランの中国問題の座談会に通訳として陪席し、久々に武田先生にお目にかかって、びっくり仰天したのは、先生が立派な（剛そうで、一本一本がてんでんばらばらの方向を向いている）口髭を生やされたことでした。ごぶさたしている間に、私の方も「朝日ジャーナル」から転々として、外報部勤務、こんどは海外勤務と仕事が変わり、「十年一昔というのは本当だナ」、とツマラヌことにあらためて感じ入っている次第です。

――N君は、「増産」の毒気にあてられたように、ぐっ

たりと下うつむいている。彼は私とちがい、山下さんの自信まんまんの話を何回もきかされているから、どうしても気疲れするにちがいない……（『日本の夫婦』『子だくさん』）

「同行記者」がサッパリものの役に立たず、やむなく十一人の大家族を向うに回して孤軍奮闘されている武田先生の姿が彷彿としてきて、まことに申訳けなかったといまでも慚愧に耐えません。当時、私はジャーナル誌に配属されて一、二年の馳出し雑誌記者。私事に立入って恐縮ですが、五年間も大学院でブラブラしたあげく先生にもなれず新聞社にもぐり込んだ、やる気のないデモシカ記者でしたから、先生も大いにてこずられたことと思います。もっとも、四十六歳で九人の子持ち、「ハタケをあけておくのはもったいない」との信念で〝子孫増産〟にはげみ、生れた子どもを徹底的にシゴく、スパルタ親父の模範、山下さんのツバを飛ばす話しっぷりのすさまじさには、さすがの武田先生もたじたじだったらしく、帰りは立川市のお寿司屋さんで小休止。「いや、ものすごかったネ、根本君」と苦笑されたのを憶えています。

この山下さんは当時、朝日新聞の運輸部のデスク（すでに停年退職）。われわれが車で取材に出かけるさいに伝票を持って行って配車をお願いする係でした。一匹狼のような変わった人物でしたから、武田先生の記事に〝百万の友〟を得たような、大変なよろこびよう。その後、どんなに車が足りないときでも、私には一発で車を出してくれる大サービスで、大いに恩恵にあずかったものでした。

話が前後しますが、編集長から「武田先生の連載ものを担当するように」と言渡されたときは、小おどりするほど嬉しかったのを覚えています。サルトル、カミュの全盛時代の仏文の学生で、武田泰淳氏や野間宏氏はいわば神様のような存在だったのですから、大張切りだったのも当然だといえましょう。しかし、数日後「連載のテーマは『日本の夫婦』」ときかされたときは、白状しますと、いささかガッカリしてしまいました。

頭の悪い文科学生上がりのつねで、「武田泰淳ともあろう大作家が、何で夫婦探訪なんて俗っぽいことをやるんだろう。それより『森と湖……』を二冊重ねたくらいの大ロマンを続々と生み出してくれればいいのに……」と、勝手なことを考えていたからです。大阪にご一緒に出張したさい――いま思い出しても冷汗が出る思いですが――妙ちきりんな戦後文学論を切り出して「武田先生のような第一次戦後派の旗手だった人が頑張って、素晴しい小説を書いて下さらないから、現代日本文学がつまんなくなってしまっ

た云々……」、と全く阿呆なことを申し上げた記憶もあります。

しかし、先生はニコニコ笑って馬鹿げた私の文学論にも応じて下さり、執筆前に、ニセ札つかいを主人公にした小説のプロットを話してくれたりしました。至らぬ同行記者に対する先生の過分なお心づかいに対して私のしたことといえば、いわばチョンボの連続、失敗談の一、二を拾ってみるとこうなります。

新幹線名古屋駅で――私の時間のやりくりの失敗で、列車にすべりこみ。荷物をかかえた泰淳先生をして、長いホームを一目散に疾走せしめるという大失態を演じました。私は「乗遅れ」を覚悟していたのですが、意外にも先生の早いこと早いこと、カモシカ少年のような全力疾走で列車に飛乗られたのであやうくセーフになりました。

議員宿舎で――社会党の多賀谷真稔氏ご夫妻を取材しておいとまするさいに、私がおしりで本箱のガラスをガチャンと割ってしまうというヘマをやりました。おわびもそこそこに先生と飛び出したのですが、こんな具合に先生はいつも「同行記者」にハラハラさせられ通しだったにちがいないと思っています。

また、取材の対象となる夫婦の選択は私に一任されていたわけですが、当時結婚して二、三年の私は、武田先生好み（？）の業の深さを感じさせるようなご夫婦よりも、若い新しいタイプの夫婦、新商売夫婦の方に興味があって、『日本の夫婦』はごらんのような内容になったのですが、先生は私の選択に一言も文句をいわれずに付合って下さいました。それと、取材開始と同時に、デスクから「武田泰淳なんてキチンキチンと原稿を渡してくれるはずがないゾ」とおどかされていたのに、いつも出稿予定日の前に原稿をいただくことができたのは仕合せでした。

さて、こんど『日本の夫婦』を再読して、先生が取材対象となったご夫婦を万が一にも傷つけぬよう、細心の配慮を払っておられる――それでいてどの話も面白くでき上がっている――のに、おそまきながら気付き感銘を受けました。われわれ記者稼業の人間にとって、『日本の夫婦』は「ひとを傷つけない取材」の、お手本でもあるようです。

（朝日新聞社勤務）

《次回配本》 第十六巻「評論6・補遺」
私と資本論・石狩平野・シルクロード五十三次・馬鹿について・三島由紀夫氏の死ののちに・わが思索わが風土・視野脱落をおそれた人・辛抱づよいニヒリスト・怪しき村の旅人（戯曲）・媒酌人は帰らない（戯曲）・北京の輩に寄するの詩 他
解説・平岡篤頼　八月三十日刊

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第十五巻　目　次

日本の夫婦……3
宗教人の旅……132
大陸の舟あそび……134
文学者らしい告白……136
犬の裁判……137
生み出す者の苦心……138
「孫子」の兵法……139
おサルさんとみそ汁……141
コバルト色の雨合羽……142
国際的な人物……143
同級生交歓……144

EECと文学……145
文人歓語の図……146
中国女性の〝女らしさ〟……159
原稿料ゼロ……165
変りつつあるソ連……166
梅棹忠夫の忠告……172
実作者の経験談……173
悪魔好き……174
植物の根や昆虫の触角のごとく……175
花は土から……180
カンヅメ論……181
イカの夫婦……182
実業家の書いた本……183
農民の発言……186

おしゃべりは楽し……187
欲望の文学……188
主婦と外国語……189
おそろしい質問……190
テレビの新人……191
母の悲しみ……192
カイロの街で……193
こちらが研究不足……204
カイロの太陽と星……205
文学を志す人々へ……206
ひらけゆく北海道展……212
『森と湖のまつり』取材紀行……214
朝日ジャーナル編『日本の思想家(1)』……215
三島由紀夫著『美しい星』……218

作家の自己弁護……220
焼きもの……222
親鸞上人架空会見……224
「新しい世界」写真展……226
箱庭の美……227
強いということ……231
〝北京・カイロ・モスクワ〟……235
青年の宗教、老人の宗教……246
文章とテーマ……249
私の「中世」……252
ガーデンブリッジ附近……255
怪人二十面相……257
ソンをしなかった輜重兵……259
夫婦原始林を探検する……262

中国語のおもしろさ……269
梅崎春生著『狂ひ凧』……272
枕山と毅堂……273
『序曲』について……276
悪　書……277
本多秋五著『続物語戦後文学史』……279
批評家さまざま……280
宗教と文学……281
まじめな文士……282
作家の生き方……283
〝文化望遠鏡〟を……284
病気と文学……285
私の書きたい女……286
はじめての本『司馬遷』……288

女傑なるかな……290
呉玉章『辛亥革命の体験』……291
親孝行……293
文学のアトランティス……294
めがね……296
椎名麟三氏について……298
かなしい動物……298
雨ニモマケズ……299
もうすこし平等に……300
中途はんぱ……301
文学者、政治を語る……302
酸素と化学肥料……303
日本的なるもの……304
中国現代劇の前進……305

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com